



Title	母親の離乳時期に関する意思決定に影響する因子について
Author(s)	伊藤, 紀代; 久木, 由季
Citation	北海道看護研究学会集録, 21, 141-143
Issue Date	2009
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39395
Type	conference paper
File Information	colley_2009-2.pdf



母親の離乳時期に関する意思決定に影響する因子について

キーワード：卒乳、離乳、断乳、意思決定

北海道大学大学院保健科学研究院

○伊藤紀代、久木由季

はじめに 母乳育児の継続や中止といった母親の離乳に関する不安・悩みに対し、我々は、どのような指導をすべきか困惑する経験をした。例えば、母乳育児の延長は肥満児の発生率低下に貢献するという報告と、夜間の授乳が乳歯う蝕形成の一因であるという報告のように対立する結果が存在する場合、どちらか一方を必要以上に強調して指導を行うべきではない。しかし現状は、専門的立場の違いによって異なる指導を行い、特に新米の母親を混乱に陥らせていることが予測される。そこで本研究では、離乳時期に関する母親の意思決定を援助するため、意思決定に影響する因子の明確化を目的とする。

用語の定義 本調査において離乳とは、子ども側から見た乳離れ（卒乳）と母親側から見た断乳の両方を含む。また、断乳は母乳栄養の終了を意味するものとする。そのため、断乳後も人工乳を継続している場合がある。

I. 研究方法 調査期間は2008年10月1日～11月14日である。健康な乳幼児を育児中の、健康な母親20名を対象としたインタビュー調査を実施した。対象者の選定には、Snowball methodを採用した。データの飽和を確認しデータ収集を終了した。質問内容は、1. 卒乳した、または卒乳しようとする子どもの月齢・年齢。2. 母乳を中断・終了した理由。3. 母乳をやめたときの母親の感情と子どもの様子。4. 実際に行った卒乳・断乳の方法である。被検者からの了承の下、ICレコーダーを使用し、それ以外の場合には手書きのメモを残した。必要時、再インタビューを行った。

データ分析は、GroenewaldのDescriptive Phenomenologyの手法に従い、bracketing、delineating concepts or units of meaning、clustering of concepts into themes、summarizing themes、and engaging in validity checkingの順に分析を行った。分析はデータ収集と同時に開始した。また、研究者間で検討を重ね、妥当性の確保に努めた。

倫理的配慮として調査に先立ち、北海道大学大学院保健科学研究院倫理委員会の承認を得た。匿名性に配慮し、データの保管はナンバーで行った。また、各人に研究の内容及趣旨、非回答の権利や、中途辞退の権利について書面・口頭にて説明し、どの場合にも何の不利益を被らないことを保証した。結果は調査結果として発表されることを説明し、調査協力の同意書を得た。その他の配慮として、母親へのインタビュー中の子どもの安全について十分に配慮した。また、インタビュアーも乳幼児を育児中の母親とし、対象者の緊張を和らげ、共感できる者とした。

II. 結果 抽出された10因子の関連について、図1に示す。

1. 子ども側の要因 歯の萌出により乳頭が噛まれたケース、離乳食の量がなかなか増えないケース、子どもがミルク好きの場合や、アレルギー体質があるため母親自身が除去食を摂っている場合、早期離乳を考える母親がいた。反対に、順調に子どもの体重が増えている場合や、夜泣きの対処に授乳している場合、「飲みたいときはパイパイといってくるし、わかっていると思うんです」というような子どもの理解力の高さは、離乳時期の延長に影響していた。

2. 母親の身体的要因 「皮膚がめくれたりしながらも我慢して授乳していた」という乳頭トラブルや、「風邪薬を飲んでいる間授乳を控えていたらおっぱいの量が落ちて出なくなった」という母親の体調、母乳不足が離乳時期を早めて

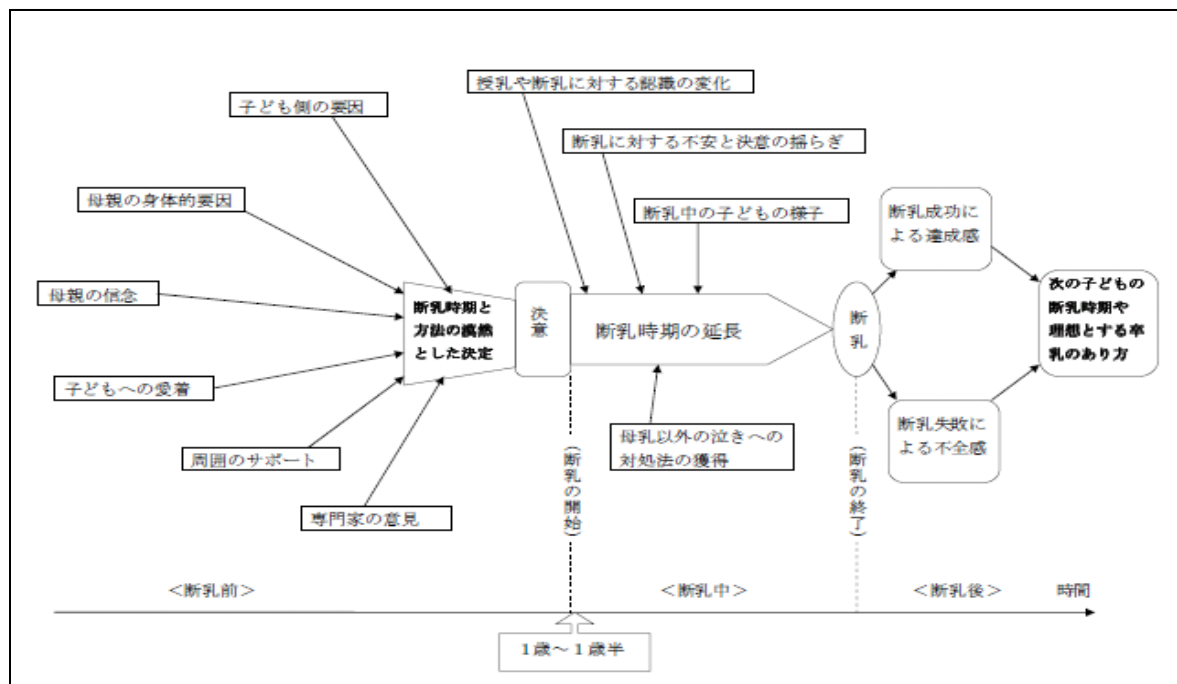


図1 離乳時期の決定に影響する因子の関連図

いた。乳腺炎や搾乳による腱鞘炎を発症し、完全母乳を断念したケースもあった。

3. 母親の信念 母親たちは、母乳の栄養学的・免疫防御的役割のほか、ミルクと比較した母乳の優位点に関しても言及していた。「今のうちはスキンシップを大事にしたい」といった愛着形成的役割についても認識しており、「おっぱいは役割を果たしたと思った」ことが断乳開始の契機となる例があった。また、「上の子の前歯が虫歯になった」という母親は、第2子の離乳を早めに設定していた。

「おっぱいをやめることはいけないことのように感じた」、「ミルクを足すことへのためらいがあった」のような母乳育児へのこだわりを持つ母親は、母乳育児に積極的な病院を選んだり、乳房ケアや食事管理等のセルフケアを行っていたが、断乳に対する罪悪感も感じていた。「子どもが強く吸うのでおっぱいが切れちゃって、でもマッサージされてあまりの痛さに抵抗したら何人かに押さえつけられてマッサージされて、もう限界だと思った」のように、入院中の母乳育児の確立が失敗した例もあった。この母親は、妊娠中からすでに授乳への抵抗感があり、「自分もミルクで育てられたからミルクでいいと思っていた」という。「あの頃は鬱だったと思う」「今でも子どものお腹がすいて泣くのが恐怖というか、怖くて常にご飯やおやつのことを考えている」と話した。このように元々授乳欲求のない母親の存在が確認された。

4. 子どもへの愛着 「おっぱいを吸っている姿は可愛い」、「おっぱいをやめるのは寂しい」、「おっぱいを欲しがっているのがわかるので、やめられない」、という子どもに対する愛着が授乳を継続させる動機付けとなっていた。

5. 周囲のサポート 「主人も義母も理解があって、おいしいおっぱいが出ている間はたっぷり飲ませてあげなって言ってくれるので、それだけでも気持ちが楽です」と家族が強力なサポート源となる一方で、「旦那のお母さんは母乳で育てた自負があって、旦那も母乳で育ったから自分の子にもと思っていただと思う」という例では、嫁である母親にとって断乳の決断を不自由にさせていた。

周囲のママ友(同じ年代の子どもを持つ母親である友人)の経験談、「男の子だから卒乳は時間がかかる」「1歳前はスムーズだけど1歳過ぎると大変」といった風説、インターネット上の情報は、自らの子の成長の度合いと比較し、断乳時期を決定する情報源となっていた。ママ友は「自分だけが大変じゃないと勇気付けられた」のように、ピアサポート機能も併せ持っていた。また、「1歳から1歳半」で卒乳という考えの母親が多く見られ、時期決定に影響していた。

公共の授乳室の整備状況や「仕事中の授乳時間をとることが困難」という社会的サポート、保育園の利用に伴う物

理的な距離も離乳時期の決定に影響していた。

6. 専門家の意見 助産師に「今はつらいけどがんばろうといわれた」ことが母乳継続を促進していた例もあった。しかし、「体重が200(g)以上も減って2500g以下になっちゃったのに母乳以外はあげちゃだめといわれた」、「1歳のアレルギー検診で『まだあげているの?』といわれた」、「歯科医の先生は夜飲ませると歯に悪いって言っていたから。産婦人科の先生は『もっとあげてもいいんじゃない?』って言っていた」のように、母親を否定したり、専門的立場の違いから異なる助言を提供し混乱させる状況があった。

7. 授乳や断乳に対する認識の変化 「子どもがいらないというように両手を突っ張ってくるようになった」「授乳のことを忘れていた」「トイレトレーニングを始めるには、母乳だとおしっこ時間があかないので難しい」といった子供の成長に伴う変化が、母親の断乳時期を検討させる一因となっていた。

8. 断乳に対する不安と決意の揺らぎ 「ミルクをあげたい自分が母親失格なんじゃないかと思えてきた」という自己肯定感が持てない例や、「あげたい気持ちと、母乳(という手段)がなくなると夜寝られなくなって困るという気持ちがある」、「欲しがら姿を見て心が揺らぎそうだった」、「(断乳が)子どもにとってどのように影響するのかという不安」といった不安や決意の揺らぎがあることが述べられ、断乳が「かわいそうであげてしまった」母親もいた。

9. 断乳中の子どもの様子 「子どもが服をめくってきた」、「子どもは一緒になって『(おっぱい)ないねー』といっている」、「お風呂のときおっぱいを必死に吸い付いてくる」などは離乳期間の延長に働き、欲しがら様子がないことは断乳継続を強化する因子として働いていた。

10. 母乳以外の泣きへの対処法の獲得 「自分の気持ちに余裕があるときは抱っこで対処」したり、「泣いたときの対処法に矛盾があった」と話す母親がいたことから、泣きへの対処法を複数持ち、泣いても対応できるという自信を持つことも離乳時期の決定に関与していた。

Ⅲ. 考察 断乳前における母親たちの離乳時期の決定に影響する因子には、【子ども側の要因】や【母親の身体的要因】、【母親の信念】、【子どもへの愛着】、【周囲のサポート】、【専門家の意見】があり、これらは断乳時期の漠然とした意思決定と断乳決意に影響していた。断乳中の母親の意思決定には、子どもの成長に伴った【授乳や断乳に対する認識の変化】や、【断乳に対する不安と決意の揺らぎ】、【断乳中の子どもの様子】、そして【母乳以外の泣きへの対処法の獲得】が影響しており、時間経過に伴う母親の判断材料の移り変わりが観察された。

Akman ら¹⁾の産後うつと離乳時期には関連があるとする報告や、自己肯定感が離乳時期の延長に関連するというO'Brien ら²⁾の報告とも食い違いは見られなかった。

さらに、本調査において、子どもが暗くなるなどの断乳失敗を経験した母親は、断乳方法や時期を反省し、もし次の子どもを持つ場合には、配慮したいということを述べており、これが次の子どもを出産したときの【母親の信念】に影響すると考えられた。このことから、断乳の成功・失敗は、授乳からの解放感による母親の生活の改善の程度からというよりは、子どもの反応によって判定されていると考えられた。

Ⅳ. 結論 10因子が抽出され、母親の断乳の段階に応じた複雑な意思決定が明らかとなった。断乳を成功させるための援助として、子どもと母親両者の希望を尊重し、専門家間でも意見の乖離がある現実についても母親へ十分な情報提供し、加えて、母親が母乳以外にも泣きへの対処方法を獲得できるよう援助することが必要と考えられる。

おわりに 調査に快く協力をいただきましたお母様方に深謝いたします。

引用文献

1) Akman I., et.al. Breastfeeding duration and postpartum psychological adjustment: Role of maternal attachment styles, Journal of Pediatrics and Child health, 44(2008), 369-373

2) O'Brien M., Buikstra E., & Hegney D. The influence of psychological factors on breastfeeding duration. Journal of Advanced Nursing 63(4), 397-408